

# 明代の神仙小説について

桜井幸江

一

明の万曆前後には、数多くの通俗小説が編まれたり、刊行されたりした。その中に、神仙を主人公とした小説がかなり含まれていることは、あまり知られていない。荒唐無稽で迷信に満ちたこの種の小説が、近年通俗小説の見直しを行ってきた中国でも、ほとんど取り上げられなかったことにも拠るが、一部の書が日本の内閣文庫にしか伝わらなかったためでもある。<sup>(1)</sup>

仙人や道教の祖師を主人公とし、その行実や活躍を描いた小説——ここでは神仙小説と呼ぶことにする——は、明代には次表の如く有る。

これらの書は、明代の靈怪小説、或いは神魔小説として扱われることが多い。魯迅の『小説史略』では、第十六篇の「明之神魔小説(上)」に『四遊記』についてのかなり詳しい記述が有り、魯迅はこの後、(中)で『西遊記』について解説している。他の小説史でも『四遊記』は『西遊記』との色濃い関係で述べられることが多い。確かに『四遊記』の中の『(四遊記)西遊記』は勿論のこと、他の三書も一読して『西遊記』の影響が強いことがわかる。しかし『東遊記』の前半、「八仙過海」に至るまでの八仙の各伝は、神仙小説と言えるし、『北遊記』の前半もその傾向が強い。(そこで表には

明 万曆 (1573~1620) 20年代~30年代 24~ 31 31序 ? 天啓 (1621~1627) 元 3序 4 7	A (北方真武祖師玄天上帝出身伝) → 『北遊記』 と称す (余象斗) B (〈新刊八仙出処〉 東遊記) (呉元泰) { 『全像五顯靈官大帝華光天王伝』 (「南遊記」 と称す) と* 『(四遊記) 西遊記』 とを合わせて 『四遊記』 と称す } C 〈新鐫晋代許旌陽得道擒蛟〉 鉄樹記 (鄧志謨) D 〈鏤五代薩真人得道〉 呪棗記 (鄧志謨) E 〈鏤唐代呂純陽得道〉 飛劍記 (鄧志謨) 古今小説 (→ 喻世明言) F 韓湘子全伝 (楊爾曾) 警世通言 醒世恆言
---	---

- 使用テキスト A : 北方文芸出版社『四遊記』 所収本 (復旦大学図書館所蔵本か)  
 東京大学東洋文化研究所蔵文元堂本を参照。  
 B : 内閣文庫本 (余文台刊本)  
 C : 内閣文庫本 (華慶堂余泗泉刊本, 万曆31年刊)  
 D : 内閣文庫本 (華慶堂余氏刊本, 万曆31年序刊)  
 E : 内閣文庫本 (華慶堂余氏刊本, 万曆間刊)  
 F : 中国書店本 (天啓三年序刊)

\* 『西遊記』 のダイジェスト版  
 『(四遊記) 西遊記』 と記す  
 こととする。

括弧付きで入れておいた。)

鄧志謨の三書や『韓湘子全伝』については、これらの書に言及していない中国小説史も目につくが、譚正璧の『中国小説発達史』では、第六章「明清通俗小説(一)」の「四大奇書(一)」で『西洋記』の記述に続いて、明人の靈怪小説として、これらの四書を含めた小説類が紹介されている。

孫楷第の『中国通俗小説書目』でも、表の書はいずれも明清小説部乙の靈怪に分類されている。

宋末元初・羅燁の『醉翁談録』では、宋代の小説話本を「靈怪」「煙粉」「伝奇」「公案」「朴刀」「杆棒」「神仙」「妖術」の八種に分け、それぞれに話本の名目だけを幾つかずつ挙げている。孫目の靈怪には、大まかに言って上記のうち「靈怪」「神仙」「妖術」の流れを汲むものが配されている。神仙の事蹟を述べていたと思われる『醉翁談録』の「神仙」の項には、十種の名目が挙がっているが、実際にどんなストーリーが語られていたか詳しくはわからない。が、宋代「神仙」という独立した項を立てていたのが、時代を経るに従って、色々な要素を取り込み、影響し合い、変化してきたものと思う。明代の神仙小説を取り出して見ることで、どんな点が神仙小説の特徴で、どんな点が他の小説類と相通ずるのか、考えていきたいと思う。

## 二

先ず、明代の神仙小説がどんな特徴を持っているのか、表の書を中心に『三言』に含まれる神仙故事にも随時ふれながら述べていこうと思う。

ここで扱う神仙小説には、かなり共通して見うけられるモチーフが幾つか有る。「下凡投胎」「七試」「賜劍」「地獄行」の四つがそれである。これらのモチーフ自体は比較的古くから有ったものようだが、明代の神仙小説の中ではど

のような展開を見せているのか、順を追って見ながら、神仙小説の特徴をさぐろうと思う。

(1) 下凡投胎

仙界に居た者が人間界に下凡し、投胎する。神仙小説に不可欠な要素の一つである。

最も素朴な形の記事を留めていると思われる『東遊記』の八仙伝では、簡単な記述ながら、鉄拐李は青牛を逃した罪で下凡している。又、鍾離権は

鍾離原是上界仙子、因掌書有過、責下塵凡至此。〔鍾離はもと上界の仙人だったが、書を掌る仕事でミスしたため、俗界に下凡されここに至った。〕

藍采和は赤脚大仙の生まれ変わり、呂洞賓はもと東華真人だが、鍾離を度化する時の言葉の間違いから下凡されている。他の四仙は、下凡投胎の具体的な記述は無いが、「生有仙骨。 〓生まれながらの仙骨を有す。」といった記述は有る。

これが呂洞賓を主人公とした『飛剣記』では、次のような記述となる。鍾離権の弟子となった慧童は、天門の上から俗世界を眺め

自思、跟了師父一十二年、整月終南山修煉、那里見这样的繁華、遂起了一点凡心。背着師父、就躡起一朵祥雲、徑投下界而來、將欲投胎出世。(慧童は)自分で考えた「師父に従って十二年、ずっと終南山で修煉を続けていて、こんな賑やかな様子は見たことがなかった。」遂に凡心を起こした。師父に背いて密かに祥雲に飛び乗り、まっすぐ下界に降りて来て、投胎して生まれ変わろうとした。〕

自らの意思で下凡し、投胎する先を捜して呂家に生まれる、という展開になる。「思凡」ということである。

同じく一種の「思凡」と思われるのが『北遊記』で、玉帝は劉家の接天樹という宝物を得たいものだ、と言ったばかりに、自分の三つの魂のうちの一魂が下凡する羽目になる。最も貴い存在であるはずの玉帝が欲心を起こすところが、なかなかおもしろい。『北遊記』の前半では、修業の挫折による投胎の繰り返しに、ほとんどの紙面が費されている。

趣向の異なった下凡投胎としては『鉄樹記』がある。主人公の許遜への投胎は次のような記述となる。

今輪係玉洞天降生。〔今回の降生は玉洞天の番である。〕

下凡は順番制ということだろうか。<sup>(2)</sup>

天啓三年の序を有す『韓湘子全伝』は、神仙小説の明代に於ける集大成とでも言うべきものだが、そこでの投胎は非常に複雑な仕組みとなる。主人公の韓湘子は、唐代の詩人・韓愈の甥という設定である。漢代の安撫生の娘・靈靈小姐が意に染まぬ結婚をしたため病死、その後、白鶴となり、二百年後には鍾離権・呂嵒（＝呂洞賓）から金丹をもらって童子となり、最後に仙桃と化して韓愈の兄嫁に投胎し、韓湘子として生を受ける。ここでは、主人公ばかりでなく、身内の者もすべて下凡投胎ということになっている。

玉帝殿前で蟠桃を争い、玻璃の玉盞を壊した冲和子と雲陽子はそれぞれ下凡する。

玉帝大怒、把那冲和子、雲陽子都貶到下界去、一个投托在永平州昌黎縣韓家的、便是冲和子、叫名韓愈、一个投托在永平州昌黎縣林家的、便是雲陽子、叫名林圭。〔玉帝は大いに怒り、冲和子と雲陽子を罰として下界に落とした。一人は永平州昌黎縣の韓家に投托した、これが冲和子で韓愈となる。一人は永平州昌黎縣の林家へ、これが雲陽子で林圭（後に湘子の舅となる）となる。〕

玉帝の前で問題を起こして二人一緒に下凡されるのは、金童・玉女というのが一般的なようだが、<sup>(4)</sup>ここでは、歴史上の實在人物・韓愈がその一役を担う。又、物語の最後の方になって、韓湘子の妻と韓愈の妻も実は下凡した者だった、と

わかる。ここまですると、世の中投胎した者ばかり、といった感さえ有る。

下凡投胎というモチーフはかなり古くから有り、『列仙伝』の「瑕丘仲」の項には謫仙人という言葉も登場する<sup>(5)</sup>。が、明代に至り、このモチーフには様々な工夫が凝らされ、物語の重要な要素となっている。

この中で異彩を放つのが『呪棗記』<sup>(6)</sup>である。主人公の薩真人は二度にわたる投胎はあるものの、下凡ではない。凡人が善行を積み修練することによって神仙となった数少ない話である。この書の冒頭は次のような七言詩で始まる。

一重天外一重天、神仙自是凡夫做、重重天上有神仙、特恐凡夫心未堅  
〔天の上に又天があり、神仙は凡夫より做れるなり、重なる天の上に神仙有り、ただ凡夫の決意が固くないことを恐れる〕

この物語の傑出した点については後に又ふれるが、冒頭の詩にそれが集約されているようにも思う。

## (2) 七試

下凡させられた元仙人や見込まれた俗人には、仙人になるべく様々な試練が与えられる。「下凡投胎」と同様、神仙小説に欠くべからざるものである。

試練の数と内容については、小説によって多少の異同が有る。小説の題にまでなっている「張道陵七試趙昇」(『諭世明言』第四十卷)は、後漢に五斗米道を開いた実在の人物・張道陵の活躍と、弟子の趙昇に対する七たびの試練を中心に描いている。この物語の本事は所謂『神仙伝』に既に見られ、又「道蔵」に収められる幾つかの資料に見られる<sup>(7)</sup>。七試のモチーフもかなり古くから有ったようだが、『諭世明言』の文章では以下のようになっている。①罵られても、師の門前から去らず。②女性の誘惑に負けず。③掘り当てた黄金を私せず。④襲った虎を恐れず、逆に諭す。⑤他人に金のこと難癖をつけられても抗弁せず、自分の衣を与える。⑥膿だらけの乞食を誠意を尽くして救う。⑦師を救うため、

命を惜しまず崖から跳び下りる。

張道陵の「七試」では、俗人なら誰でも持ちうる欲や恐れを試されていて、神仙小説では最も一般的な内容である。他の小説での試練もこれに類する。『東遊記』の呂洞賓は、黄梁の夢を見た後、

雲房自設十難以試之。〔雲房（鍾離権）はこれより十難を設けて呂洞賓を試すこととなった。〕

十試ではあるが、張道陵の七試と内容的にはさほど差はない。ただ十試の最初は次のように始まる。

洞賓一日自外歸、忽見家人皆病死。洞賓委之大數、心無懊恨、但厚備葬具而已。須臾死者皆復生、而洞賓亦不之怪。〔洞賓がある日外から帰ってくると、家の者が皆病死していた。が、洞賓はこれを運命であるとして、嘆き悩むことはなく、丁重に葬儀の用意をただけだった。しばらくして死者は皆蘇ったが、洞賓はこれも怪しまなかつた。〕

人間の持つ悲しみ・驚き・恐れといった感情を捨て去る、ということだろう。

『飛劍記』でも、やはり鍾離権が

于是暗暗的試他七次、還是真心學道、還是假心學道、〔そこで秘かに呂洞賓を七たび試し、果たして心から道を学ぶのか、それとも上べだけなのか。〕

と七試を行う。六番目の試では、現われた山魃魍魎の鬼に全く動じない。

紛紛擾擾、拋磚的拋磚、弄瓦的弄瓦、舞刀的舞刀、揮刃的揮刃、皆來侮弄着純陽子。〔紛紛、擾擾として現われ、磚を投げるもの、瓦を手にするもの、刀をふるうもの、刃を振り回すもの、皆で寄ってたかつて純陽子（呂洞賓）をなぶった。〕

「怪を見ても怪とせず」ということだが、これとほとんど同じ文が『呪棗記』の中に見い出せる。薩真人は、疫病に罹

った一家を救おうとし、その家に赴くと沢山の精怪がいる。

抛磚的抛磚、弄瓦的弄瓦、舞棍的舞棍、耍拳的耍拳。「磚を投げるもの、瓦を手にするもの、棍を振りかざすもの、拳を振り回すもの。」

精怪の現われ方には、決まったパターンがあるようである。

右の『呪棗記』の記述は所謂「七試」の中の一部だが、『呪棗記』の試練は、他の小説と一線を画する設定となっている。

主人公の薩真人に廟を焼かれた王悪が、十二年間に亘って真人の後をつけ、その過失を見つけ出して復讐しようとするもので、試練の中身にも独自性が有る。女性の誘惑・金の誘惑に負けないという極く一般的なものもあるが、激しい風雨のために旅の足を止められても愚痴らない、とか、急に便意を催すが隠れる物陰が無く、傘をさして用を足し、すぐに土で掩って三光（日月星）を汚さないようにする等、身の危険を感じさせるとような「試」は無いものの、敵役の王悪が感服し、終には真人の従者となる動機として十分な、素朴な誠実さが窺える。

『韓湘子全伝』に至ると、所謂「七試」は数度に亘って現われる。勿論、主人公・韓湘子に対するものが中心だが、叔父の韓愈に対する、現世への末練を捨てさせるための試や、牧童に対しての、度化するに足るかどうかの試も有る。ここで氣のつくことは、かの有名な唐の伝奇『杜子春伝』の試がほとんどそのまま取り込まれていることである。炬を守るべく言いつかった韓湘子の前には、劍を振りかざす金甲の將軍、猛虎・毒蛇等、大雨・雷が現出し、地獄の獄卒や鬼王が妻や父母を引きずり出し刑を加える。この後、膿だらけの臭人や白牡丹に事よせる色欲の誘いも有るが、それに全く動じない韓湘子の前に金丹は成る。

『杜子春伝』では、女性に生まれ変わった杜子春が我が子を殺されて、思わず「アアッ」と声を出してしまい、仙薬



は成らず、仙人から容赦なく叱責されて悄然と去って行く。そこには人間らしい感情をすべて否定した、異人たる仙人の面目躍如たるものがある。

外見も行動も常人からは計り知れない人間に対する、畏怖や憧憬が神仙説話を形造る一面でもあったようだが、明代の神仙小説ではそれが薄らいでいる。『醒世恆言』の「杜子春三入長安」では『韓湘子全伝』と異なり、仙薬は成らないものの、最終的には杜子春は仙人の仲間入りをするという、ハッピーエンドに終わる。

神仙小説の主人公である仙人のほとんどが下凡した者であれば、途中に幾多の試練が有っても最終的には仙人に戻る、安心して大団円を待てるわけである。その反面、話の展開は硬直化し、いきおい細かな点での味つけに主力が注がれるようになる。又、仙人には大仰な官名が冠せられ、玉帝以下整備された仙官体制の中に組み込まれる。沢田瑞穂氏が、神仙説話は本来は乞食の伝承であると指摘されたが、<sup>(8)</sup>明代の神仙小説に至っては、それが大部変質してきているようである。

### (3) 賜劍

劍を授けられての妖怪退治は、一見、神仙小説となじまないように見えるが、かなり共通したモチーフと言える。特に、呂洞賓と劍との結びつきが強いようだ。『東遊記』では

洞賓既得雲房之道、火龍真人天遁劍法、始遊江淮。(呂洞賓は雲房の道を会得し、火龍真人の天遁劍法も得て、江淮地方を遊歴することとなる。)

ハッキリと劍を授けたとは記述されていないが、この直後に、劍による蛟精の退治が有り、後半の竜との戦いにも劍が

活躍する。

呂洞賓を主人公とした『飛劍記』、題名が示す通り、劍による活躍が多く有る。先ほどの『東遊記』の記述に相当する部分は、かなりの分量となる。崑崙山の銅を用い、女媧が石を煉った時の炭を使って作った火竜真人の劍を、呂洞賓は物欲しそうな顔をして、終には授けてもらう。

火竜真人道、此二劍、一屬雄、一屬雌、君以此劍自衛則可、以斬邪則可、若以此殺人則不可也。〔火竜真人が言った。「この二劍、一本は雄性、一本は雌性、この劍で身を守るもよし、邪を斬るもよし、が人を殺そうとすれば、それは適わない。」〕

こうして火竜真人の二劍を得た呂洞賓は、先ず呂梁洪での蛟退治、永寧城の虎退治をする。この劍は空中を飛ぶ、そこから『飛劍記』と題される。その後、白牡丹(9)からの採陰補陽を邪魔した黄竜禪師を斬ろうとして、逆に雄劍を取り上げられ、雌劍だけを返される。その上

今日這口劍、却要你佩在背脊之上。要斬他人、拔出鞘來、先從你項下經過。斬妖誅邪、聽你使用、如要傷人、先傷你自己。〔今日よりこの劍は背に背負わなければいけない。他の者を斬ろうとする時には、鞘から抜いて先ず自分の首の下を通ることになる。妖を斬り邪を誅す時は、お前の言う通りになるが、人を傷つけようとすると、先に自分を傷つけることになる。〕

劍を背負っている呂洞賓の姿は広く知られ、『四遊記』の挿絵等(10)にも描かれている。

この黄竜禪師との戦いが一つの物語になったのが『醒世恆言』第二十一卷の「呂洞賓飛劍斬黄竜」である。ここでは師の鍾離から降魔太阿神光宝劍を授けられる。この劍は、相手の住所氏名を言って念呪すると、青竜と化して飛んで行き、その首を斬って銜えて帰って来る。呂洞賓は、和尚と騒ぎを起こすな、という師の言い付けに背き、黄竜寺の慧南

禪師にかかつていく。呂洞賓の命で飛んで行った劍は、禪師を斬らずに泥に刺さったまま抜けなくなる。洞賓は逆に禪師に諭されてしまう。

仙人と言えば呂洞賓、呂洞賓と言えば仙人、誰もが知っている仙人の代表格が強く劍と結びついていることは、神仙小説を特徴づけるものの一つになると思う。

呂洞賓以外では『鉄樹記』の主人公が劍を賜わって、妖を斬る。

伏金星乃具表奏聞於玉帝、奏聞……望乞上帝、勅差天使、賚賜斬妖神劍、付與許遜、助斬妖精、免使黎民遭害〔伏して太白金星は玉帝に申し上げた、奏じて曰く……上帝にお願い申し上げます。天使に斬妖神劍を持たせて遣わし、許遜に与え妖精を斬り除く手助けとし、百姓が害に遭わなくてすむようご配慮下さい。〕

そして、延々と続く撃竜との戦いの中で、刀は大いに力を発揮する。

今まで述べてきたもの以外にも、劍の授与は見られる。『呪棗記』の薩真人の三宝は、呪棗・棕扇・五雷之法の三つだが、それ以外にも、上清宮で張天師から劍を授けられる。

彼時天師遵了父命、復取一口寶劍付與薩真人、說道、此劍可以斬邪、可以護法、宜珍重之。〔この時、天師は父の命によって、復た宝劍一振りを取り出し薩真人に与えて言うのに、この劍で邪を斬り法を護ることができる、珍重せよ。〕

しかし、実際に劍を用いる場面は用意されていない。

『喻世明言』の「張道陵七試趙昇」の中でも、雲に乗った童子（太上老君）が衆鬼魔王を退治するようにと、張真人に符籙書や経などと一緒に雌雄劍二振りを与える。『北遊記』では妙樂天尊が主人公の祖師に宝劍を与える。邪魔に遇った時、その劍を振りかざせば邪は去る、ということ、竹竿精や蟾精を退治するが、その後はほとんど活躍しない。

これらの剣は、言わば仙人達に与えられる形式化された必需品である。剣自体の持つ神秘性・辟邪性に基づくものであろう。

#### (4) 地獄行

神仙小説と地獄も又関連深いものと言える。「韓湘子全伝」第四回に登場した呂洞賓は自己紹介して次のように語る。貧道乃本朝士子、祖貫是河中府夏懸人也……(中略)……前到邯鄲十里黃花鋪垂楊樹下得遇鍾師父、度我三遭四起不肯回心、他把蘆席一片化作一座地獄、內有十大閻君、把我一靈眞性攝在葫蘆內、我夢醒回來、方才曉得爲官者不到頭、爲富者不長久、于是棄儒修行、得成正果、我便是兩口先生也。(私は本朝の人間で、本籍は河中府夏懸……(中略)……邯鄲まで十里の黃花鋪まで来て、楊樹の下で鍾離師父に出遇った。師父の度重なる度化にもかかわらず私が心を変えないため、師父は葦の敷き物を、中に十人の閻君が居る地獄に化し、私の魂を瓢箪の中に吸い込んだ。夢から醒めてやっと、官吏や富貴が永く続くものでない事を悟り、そこで儒の道棄て修行、本当の悟りを開いた。私こそ兩口(二口)先生である。)

中々現世を棄てようとしなない相手を度化するための手段として、地獄を登場させる。どんな生活を送っている者でも、恐しい死は免かれがたい、生死を越えた存在になりたい、と初めて悟るのである。元曲の中にも同様の記述が有ることが指摘されている。<sup>(11)</sup>

『韓湘子全伝』では、これとは別に、かなりの紙面を割いての地獄行が有る。その第十六回は、甥の韓湘子の度重なる度化にもかかわらず韓愈は執拗に官に恋着し、そのため度化の期限が間に合わないのでは、と心配した湘子が、陰司へ叔父の余命を調べに行く、という話である。湘子の光と神気は地獄を突き抜けるほど強く、地獄は上を下への大騒ぎ

となる。十殿閻君の出迎えを受けた湘子は報応輪廻簿を受け取り、韓愈と岳父・林圭の記述を消してしまふ。そして盛大な見送りの中、陽世に戻つて来る。

この話の途中に次のような言葉がある。「閻王殿中除名字、紫府瑤池列姓名。閻王殿に有る自分の名を（生死簿から）除き、紫府瑤池に名を列ねよう。」これとほとんど同じ記述がやはり元曲の中にも見い出せる。「我與他閻王簿上除生死紫府宮中立姓名。」（「任風子」第一折）「我着他閻王殿上除生死、紫府宮中立姓名。」（「鐵拐李」楔子）生死を越えた存在になるには手続きが必要で、これがその手続きであろう。決まり文句になっているようだ。

この他に「七試」で述べたように、試練の一つとして地獄を現出させたりする。

そしてもう一つ、『呪棗記』第十一回〜第十三回には今まで述べたものとは異なる地獄行が有る。<sup>(12)</sup> 地獄行、というより地獄巡りである。主人公の薩真人は二度にわたる投胎の末、薩守堅として生を受ける。胥吏となった守堅は、筆を操つて無実の人間を死に追いやることとなり、又医者になってからは投薬ミスで三人を死なせてしまふ。その後一切を捨て修行を積むが、これらの人々の魂を救うため、王善（王悪変じて）を伴つて地獄へ赴く。鬼門関から森羅殿へ、そこから崔判官の道案内で賞善行台の八つの府を見て、地獄巡りへと移る。地獄巡りの詳細はここでは省くが、最後に枉死城で自分が死なせてしまった者や王悪が生贄として食べた子どもたちに囲まれ、判官、関羽真君の手助けで陽世に戻つて来る。そして約束した通り、西河で盛大な供養の道場を開くのである。

仙人としての修行とは直接関係のないように見える『呪棗記』の地獄巡りだが、最後に現世での罪を一切償うことによつて、初めて本当の意味での登仙となるのである。

三

明代の神仙小説では、仙人が下凡して幾度かの試練にも耐え、又、地獄行をまじえながら剣を授かって各地の妖怪を退治したりして、終には登仙する、というのが一般的な話の展開だったようだ。

ここで思い至るのが、明・万曆刊と思しき『唐鍾馗全伝』である。魔除けの神・鍾馗を主人公とした小説で、この小説と包公説話との関連については既に拙稿<sup>(13)</sup>で述べたが、実はこの『唐鍾馗全伝』は今まで述べてきた神仙小説のモチーフをすべて兼ね備えている。

鍾馗の母は夢の中で神人から紅日をもって吞み込み懐胎する、そして、上界の武曲星を托されたのだ、と言われる。当然の事ながら鍾馗の誕生には様々な瑞兆が現われる。

その後、学問に励む鍾馗に玉帝の試が与えられる。「七試」ではなく一つだけだが。女性に化した司簿総管が盛んに鍾馗を誘惑するが、鍾馗はそれに応じない。「試」に合格したわけである。

その後、

帝呼天使而命之曰、海州鍾馗、爲人勁直、精通神明、今賜他筆一枝、劔一把、紀人間之善惡、收天下之妖魔、〔玉帝は天の使いを呼んで命じた「海州の鍾馗は人となりが剛直・聡明。今、筆一本と劔一振りを受け、世の中の善悪を記し、天下の妖魔を鎮めさせよう」。〕

劔を得た鍾馗は、各地を巡っての妖怪退治を始める。

そして、応試に失敗した鍾馗は自殺（？肝心な部分が欠葉）、金童玉女に導かれての地獄巡りが有る。冥司での調査が終わった鍾馗は再び人間界での妖怪退治を始める。（包公説話との関連が見られるのは、特に後半の妖怪退治である。）

鍾馗については元の薩都刺の詩や『三教源流搜神大全』に、終南山の進士である、という記述が有る。<sup>(14)</sup>『唐鍾馗全伝』の中でも、終南山は大事な場所である。応試に失敗した鍾馗が隠れ、又、冥司から帰って来て拠点とするのも終南山である。終南山は神仙・道教と関連深い場所で、特に全真教にとっては大事な所であったようだ。<sup>(15)</sup>『飛劍記』にも『韓湘子全伝』にも終南山は頻繁に登場する。

『唐鍾馗全伝』は万暦頃に流行った神仙小説の体を取り、そこに同じく流行った包公説話を取り込んだもの、と言えるようだ。鍾馗は父の誕生日を祝って次のような詞を呈す。

壽燭光輝、壽香烟繞、壽酒滿斟、壽果不少、壽比終南山高、壽如松柏老、今日八仙來慶壽、渾如壽星下蓬島（目出度き燭は光り輝き、目出度き香は馥郁と流れる、目出度き酒は盃に満ち、目出度き果物は溢れんばかり、ことぶき壽は終南山の高きに比し、松柏の永きが如し、今日八仙降り来たりて寿を慶す、寿星の蓬萊島に下れるが如し）

ところで、神仙小説のモチーフの幾つかは、他の小説類と相通するものでもある。「下凡投胎」について言えば、それと意を全く同じにするものではないが、明代の通俗小説のほとんどに「転生」が見られる。『水滸伝』然り、『西遊記』然り……。『賜劍』も、劍を得てからの妖怪退治に目を移せば、様々な戦いの場面に通ずるものがある。

「地獄巡り」については、最近、大塚秀高氏が関連のある興味深い文章を書いている。<sup>(16)</sup>所謂「靈怪小説」が本来、孤魂超度を勧めるために語られたもので、その手段としての地獄巡りが語りを中心に移って行った、というものである。『西遊記』『西洋記』全体も地獄巡りと見なせる、又、諸国巡り・征伐というモチーフにも変形しうるといふもので、仙伝小説の神仙の修行も、諸国巡りのモチーフの仲間に入れてよいかもしれない、としている。

この論を進めると、各地で難事件を解決していく包拯、あの世の裁判官でもある包拯を主人公とした『百家公案』『竜

凶公案』も同じ基盤を持つと言える。実際、『百家公案』には、『竜凶公案』では除かれた妖怪退治の話が幾つもあり、その第五十一話では降魔宝剣で妖怪退治をしている。

明代の通俗小説には当然の事ながら、共通の基盤が有り、そこには道教も色濃く関わっていると思われる。この基盤の上に、それぞれの特徴を有した小説が枝分かれしていると言えるが、仙人や道教の祖師を主人公とし先に述べたモチーフを備える神仙小説を見ていくことで、明代通俗小説の基盤を考える一助になればと考える。

注

- (1) 内閣文庫に存する鄧志謨の三書『呪棗記』『飛劍記』『鉄樹記』のうち前二書は他に伝わらない。この三書については小野四平氏に以下の論考が有る。「内閣文庫本『許仙鉄樹記』について」(『集刊東洋学』一五・一九六六)「呂洞賓伝説について」(『東方宗教』三二・一九六八)「鄧志謨の道教小説について」(『中国古典小説研究専集四』所収・聯経出版事業公司)
- (2) 『鉄樹記』を承けた『警世通言』第四十巻「旌陽宮鉄樹鎮妖」では次のような文となっている。「看有何仙輪當下世?」どの仙人が下凡すべき順番になっているのか見てみよう。」
- (3) 沢田瑞穂「韓湘子伝説と俗文学」(『中国学誌』(泰山文物社) 5) を参照。
- (4) 元曲の「沙門島張生煮海」や「鉄拐李度金童玉女」でも金童玉女が思凡投胎したと有り、楊振良著『孟姜女研究』(学生書局)では、金童が琉璃盞を壊し玉女がそれを笑った事から二人は下凡され、孟姜女・万杞梁に投胎、その後七世にわたって終生を共にできない夫婦に生まれ変わるといふ説を紹介している。
- (5) 『列仙伝校正本』(『郝氏遺書』所収)に拠ると「……復來至甯北方謂之謫仙人焉。」という記述になっている。
- (6) 李豊楙「鄧志謨『薩真人呪棗記』研究」(『漢学研究』六一一、一九八八・六)を参照。
- (7) 山川英彦「『諭世明言』所収「張道陵七試趙昇」來源考」(『神戸外大論叢』三三二―三三)を参照。



(8) 沢田瑞穂「神仙説話の研究」(『天理大学学報』六六、一九七〇)を参照。

(9) 『東遊記』では名妓・白牡丹、『飛剣記』では良家の子女・白牡丹となっているが、呂洞賓との交歓は有名な故事で、その後独立した『呂純陽三戯白牡丹』(鼓詞か)となる。

(10) 北方文学出版社『四遊記』(復旦大学図書館蔵版に拠る)の挿絵にも見ることが出来る。

(11) 中鉢雅量「神仙道化劇の成立」(『日本中国学会報』二八、一九七六)を参照。

(12) 『呪棗記』の地獄巡りとはほとんど同じ記述が『三宝大監西洋記通俗演義』に有り、大塚秀高「中国通俗小説の書目と提要」

(『中国古典小説研究動態』第二号、一九八八)に詳しい。以前、拙稿で『唐鍾馗全伝』の地獄巡りは他に類を見ないので、と書いたが、ここに訂正する。

(13) 『唐鍾馗全伝』について(『お茶の水女子大学中国文学会報』第五号)

(14) (13)の前掲論文中で言及。

(15) (11)の前掲論文中で言及。

(16) (12)の前掲論文。